

美術品補償制度の今後に向けて

東京国立近代美術館

<ポロック展>

内容的な重要性とともに、借用先の多さと評価額の高騰、さらには観客動員が爆発的には望めない状況など、まさに補償制度の適用にふさわしいものであり、制度の成立の年に開催されたことは記念すべきことであったと考える。

・イラン関連

70年代にイラン王家に所蔵されて以来国外に出ていなかった大作《インディアンレッドの地の壁画》が出品された背景には、政府補償がイラン側の信頼を得たという面がある。他国には貸し出してこなかったこの作品を今回日本に貸し出すことについてイラン側は一貫して揺らがなかった。

しかしながら、国家情勢も不安定で、また一部工芸品などを除き美術品の海外輸送の経験の極めて少ないイランとの現実の作業面でのやりとりは簡単ではなく、現地日本大使館の協力等でなんとか実現したというのが実情である。

現地での通関過程が非常に不安定で、輸出時も直前まで日時が流動し、また返却時に税関に長く留め置かれたことはこちらからはいかんともしがたい事態とはいえ、作品に影響が出れば、責任を問われる余地も皆無ではなく、難しいところではあった。しかし、東京国立近代美術館館員が現地での点検・集荷に出向いたことで状況はある程度は改善された面もある。また、大局的に言って、このような交流の少ない国とのやりとりを開くきっかけとして本制度は大きく機能したし、今後も危険は見据えつつも、そのように機能してほしい。また、海外の民間保険会社が対イラン制裁の関連で付保を拒否した際にも損保ジャパンによる付保が得られたことも本制度との関連の中で高く評価されるのではないかと。

<ベーコン展>

現在豊田でまだ開催中のため基本的にはコメントは控えるが、

館の施設や体制についての書類は東京国立近代美術館は2度目のため労力の多少の軽減はあったが、書式自体に変更もあり改めて作成した部分も多い。制度立ち上げ期なので当面はやむを得なかったと思われるが、施設資料については一度適用が認められた館についてはより大幅な簡略化を今後検討していただきたい。

各所蔵館から一点ずつの集荷が多く、かつ旅客便に乗らず貨物便で運ばねばならないものがほとんどであるなど、輸送経費がかさみ、また本制度適用の受諾率も低くかつ直前まで

その結論が出ないといった流動的な状況があるなか、保険料の見積もりも日々変化し、運営担当の日本経済新聞社は予算面でのぎりぎりのやりくりを続けた。貸し出し側の都合で事が運ぶので申請のスケジュールはどうしても厳しくなりがち。

<設備・運営体制など>

これまで借用先以外から保全保安についてのチェックを受けた経験があまりなく、本制度の申請は、美術館設備、運営体制一般についてあらためて見直し、また改善を図る良い機会となった。また、開梱時などに専門委員や文化庁職員が現場に立ち合われたことも、良い意味での刺激になった。

一方で安全管理の徹底化のチェックの細かさ、多さに比し、保険料軽減効果が少なく、そのバランスは今後問題となろう。申請書の施設情報記載や専門委員からの質問は制度の立ち上げ時から比べより多数で細かくなってきている。作品安全管理はもちろん重要だが、美術館の業務は、企画、研究、展示、教育、広報、普及ほか多岐にわたり、少数の学芸員がそのすべてを担う現状では、作品保全に学芸員がすべてを傾注できる環境にない。ますます高まる保安、保存面での高い要求水準を今後地方公立美術館などがクリアしていくのはかなり難しいのではないかとも思われる。

上記の様な困難もしかし、劇的な保険料軽減があればむしろ報われる努力として認知されていくのではないか。とりわけ今後、摘要展覧会の総評価額の50億円からの引き下げも検討されると聞いている中、摘要時の民間補償分の保険料の低減化は制度の有効な継続と機能のために必須ではないか。損保業界の理解と協力が日々進みつつあると聞いているが、地震やテロは1億円以上が免責となっている現状にもかんがみ、今後なお一層の実質的な軽減効果を望みたい。

<保存と展示のジレンマ>

作品保全面でのチェックには言い出せばきりが無い面がある。やや極論すれば展覧会のための作品移動自体がもともとリスクである。リスクが零ならそもそも補償制度も不要となろう。保全面の水準をとにかく上げていくという発想のみではなく、公開のメリットとリスクを正しく見ていく必要がある。これは展覧会の内容、開催意義についても一定の審査をすることもあり得ることを意味しないか。

<展覧会内容と補償制度>

多数の所蔵先から借用するポロックやベーコンのような場合輸送経路やタイムテーブル、クーリエや梱包方法その他詳細にわたり直前まで交渉と検討を重ねることになり、申請手続きの確定は遅れがちになる（文化庁の配慮はあったが）。また、所蔵先からの摘要可否に加え制度適用の場合の保険料見積もりも日々変わることになるので、浮動要因が多く、担

当の新聞社事業部で収支の見込みがなかなか立たない。そのためとりわけベーコン展は出品作品の最終確定にまで収支計算が影響し続け、結局、承諾を得た作品の多くの出品を断念した。

その意味で、戦後の新しい時代の先進的な企画であるポロックやベーコンはまさに本制度があつてこそ初めて成立した企画であり、いわんや国民に還元すべき利益などは全く上がり様がない。その点、海外大美術館のコレクション展などは運営も比較的一元的で容易、また大量動員が図れるなど、まったく異なる収支構造があると思われる。(言ってしまうえば制度適用がなくても十分成り立つ)。本制度は展覧会の内容に踏み込むというスタンスが基本的にはないようだが、審査の場において、上記の様な背景も踏まえ、内容的な評価もある程度は審査対象としてもよいのではないか。